

# 令和7年度

## 一般入学試験A日程 学科試験問題

### 国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～18ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

## 植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

<sup>A</sup>良寛のいましめの言葉

良寛<sup>りょうかん</sup>は人に物を教えたり説教したりすることのよほどにきらいだった人で、どんな所でも仏教の話や教訓など語ったことがなかったらしい。その教えぎらいの良寛が、人に頼まれてやむなく書いたものに「戒語」、つまりいましめの言葉というのがある。良寛の人間に対する好みがどういいうものであったかがわかって面白いものだが、現代社会にあてはめて見直すとそれが今でも光って見える。

たとえば「バンネン」に世話になった島崎村の木村元右衛門の娘かのが嫁にいくと決ったとき、頼まれて心得をいろいろ記したものだ今見ても面白い。わたしが今の言葉に訳したものを示すと、

- 一、掃き掃除は自分でする事。
- 一、目上を敬い、目下を憐れみ、いのちあるものは鳥けだものにいたるまで情をかけてやる事。
- 一、げらげら笑い、ふくれっ面、手先でものを弄ぶ、むだ口、立ち聞き、隙間のぞき、よそ見、こういった事は決してはならぬ事。

こういったもので、とくに最後の一項など、かのは年頃でよくそんなことをしていたのであろうが、現代の娘たちにこそこれは与えてやりたいような戒語である。電車の中などで大勢で「げらげら笑い」をし、かましい物言いをしている娘たちを見ると、高峰秀子さんならずとも日本の女が持っていた慎しみとかたしなみはどこへいつてしまったのかと歎かれるよるだが、つまりそれは人間を卑しく見せる、美しくはないからよしなさいと良寛はいつているのだ。

良寛はほかにも何枚も「戒語」を書いているが、その中でどれにも共通する、必ず一番最初に記す項目は物の言い方に関するものである。良寛が最もきらったものは、「ことばのおほき」「はやこと（早口ことば）」「かしましくものいふ」「口のはやき」「ことごとしくものいふ」「くちまね」「物知り顔にいふ」「人の物いひきらぬ中に物いふ」「へらず口」「あひだのきれ

ぬ様に物いふ」「かたおどけ（ひとりで面白がっている）」「ことばのたがふ」「ことばのきはどき」「ものいひのはしたなき」「人のことばを笑ふ」「しらぬ事を知ったげにいふ」等々、口の利き方、物の言い方に関することどもであった。

### マスメディアの語り口

よほどにそれらをきらい、そんな物言いを卑しいと見たのだ。が、ひるがえってこれを現代日本社会にあてはめてみると、たとえばテレビやラジオでの物言いは、アナウンサーといわず芸能人のおしゃべりといわず、「トークショー」なるものも、ニュースも、すべてがこれに「イガイトウ」するのではなからうか。日本人は一般に昔にくらべて言葉数が多くなり、早口になったのは事実だが、それをさらにひどくしてしまった元凶はマスメディアの物言いだ、とわたしは思う。

この「戒語」をよく見ると、良寛は、目立ちたがり屋、自己宣伝、口の達者、言葉に実のない者、騒がしい者、おしゃべり者などをとくにきらい、卑しいと見ていたことがわかるが、それらはすべて現代マスメディアにあてはまるのではなからうか。わたしはわが家に職人が入って工事中ずっとラジオをつけっ放しにしていたので（近頃はそんな職人が多いのだ）聞くともなく聞いていたが、現代のラジオでの話というのは実に下品なもので、昔なら猥談わいたんといって男が片隅でひそひそ話したような事柄を、芸能人と「チョウウシユウたる主婦などが平気でしているのであった。今日の無作法、下品さは、マスメディアにおいてきわまれりと言っている。「ものいひのはしたなき」「ことばのきはどき」など平気で、むしろそんなしゃべり方をしてでも目立ちたがりたいたいのである。しかもこの下品さは年々にひどくなっていくふうで、恥をさらすようでも外国人には見せられたものでない。

◇卑しくならぬために現代社会ではテレビ、ラジオなどの影響に対し、よほどに警戒せねばならぬ事。

### 言葉遣いについて

正しい言葉遣いをするかどうかは、人間の品位を定める重大な要点である。言葉遣いの汚い者は人柄も汚く、言葉遣いきちんとしている者はその人柄もきちんとしている。

たとえば近頃政治家などがしきりに「させていただく」という物言いをし、それをよほどに謙譲な言い方だと思ひこんでいるらしいが、ちよつと考えてみれば「そんな言い方がいかに傲慢無礼な物言いかにすぐ気がつくはずなのに、ひとたび流行となると無批判に誰もがそんな言い方をするようになる。」

しかし正しい敬語というものはあるのであり、敬語を正しく使えるかどうかは作法の柱だと言つていい。言葉遣いが明哲で正しい人は、それだけでも人柄が上品に見える。そして作法とは人間を品よくする術クレストだとすれば、正しい言葉遣いを学ぶのが作法の初めということになる。

そして正しい言葉遣いは学ばねばできるものでなく、これこそ子供の時から躰けられるかどうかで決る事柄だろう。

そこでわたしがすぐ思い出すのは青木玉『小石川の家』（講談社、一九九四年）が、一番初めに記すエピソードだ。青木玉は幸田文の娘であり、文は露伴の娘で、文が離婚して母娘ともども露伴の家に同居するために行く途中、文が玉にこう教えたとしたというのである。

「今日これから小石川のおじいちやまの所へゆくよ、向うへ行つたら『よろしくお願ひ申します』と御挨拶しなさい。

それから何かおじいちやまがおつしやつたら、言われた通りにすること、口応えや重ね返事、大きな声で騒ぐこと、やたら動き廻ること、家から勝手に外へ出ることもしてはいけない。とにかくお行儀よくおとなしくするの、解つた」

「うん」

と返事をしたら、

「それ、その、うんもいけない、返事はいと一ト言よ」

言われてはいと言つたが、この時言われたことがこの先どれ程守るにむずかしく、総ての生活がこの時を境にして、一変したか、私は気付いていなかった。

それはそうだろう、娘はやつと十一歳である。それが世間ふつうなら一番孫を溺愛するのは祖父といわれるその祖父の家に行くのに、このきびしい訓戒の条々なのだ。いまではもうこれに耐えられる子供もいまいが、一九三八年に十一歳だった

娘はこの命令に耐え通し、きれいな言葉遣いと行儀を身につけるにいたった。が、それにしてもこのとき母が娘に命じた行儀作法が、良寛の「戒語」でたしなめた条々と逐一符を合あつすることにわたしは驚き、なるほど上品な作法とは時代が変っても変らぬものだなと感心するのである。

これはどこの国においても同じであろう。言葉の多きは軽んじられ、言葉の雑なるは卑しめられる。注『葉隠』に十言うべきところをつねに一しか言うまいとした口数を極度に惜しんだ武士の逸話がでていますが、これは彼のみでなく江戸時代の大方の武士の心得であったろう。ただ彼らはその口にした一の言葉はいのちがけで守るエギガイであったから、その言葉が千金の重さを持っていたのだ。

### ジェントルマンと武士

わたしは英国のジェントルマンといわれる階層の人に何度か会って話したが、彼らに共通するのはその物言いの物静かにして口数少ないこと、ゆっくり明瞭に口を利くこと、礼儀正しく穏やかで表情をあまり動かさぬこと、であった。その代り彼らはオテイチヨウだが自説は決してくつがえさなかつた。ある毅然とした感じと、物に動じない落着きがどの一人からも感じられた。彼らはパブリックスクールの生活と訓育を通じて、十代にすでにそういう立居ふるまいの仕方身につけたのであるらしかった。パブリックスクールの教育が最も重んじるのは品性、「紳士らしい行為」をすることで、知的能力は最後である。フィリップ・メイソン『英国の紳士』（原著一九八二年、晶文社、一九九一年）という本にパブリックスクールの特徴をこう記してある。

大抵、シ純粹に知的な成功は低く見られていた。「人格」こそ重要で、それは団体競技と苦勞を通じて培つちかわれる。風呂の水は冷たく寮は寒い。雨について走り粗食に耐える。それが「人格」を陶冶とうぎするに役立った。

今の日本の子供でこんな寮生活に耐えられる者はいるかいなか、とにかく D という言葉そのものの生活で、それが「人格」を作ったというのである。ここには今の日本では廃語になったような、粗食、人格、苦勞、陶冶などという言葉

がでてくるが、人間が人間となるためにはこれらのものが欠かせぬのであろう。人は快適と便利と安楽とばかり求めていては「人格」を作ることができないのである。

それにしてもこのパブリックスクールの生活が、昔の日本の武士の日常生活にあまりにもよく似ていること、ジェントルマンの心がけが武士の心構えに通じていることは、やはり人間作り<sup>E</sup>ということに関して暗示的である。

(中野孝次『現代人の作法』より)

\*出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

注 『葉隠』…武士道を論じた書。佐賀藩士山本常朝の筆録。

問1 傍線部ア～オで示したカタカナの太字の部分と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の1～4の中から一つ選びなさい。

ア バンネン

- 1 人の死を悼む歌をバンカという
- 2 京都のバンシユウは紅葉が見事だ
- 3 失業して生活のキバンを失う
- 4 休日に小児科のトウバン医を探す

イ ガイトウ

- 1 ガイトウに立って演説する
- 2 冬用のガイトウを着る
- 3 トウガイ官庁に問い合わせる
- 4 ヒガイ届けを提出する

ウ チョウシユウ

- 1 国民から租税をチョウシユウする
- 2 チョウシユウは長門国の別称だ
- 3 ケイチョウフハクな言動を止めよ
- 4 ケイチョウに値する意見である

エ キガイ

- 1 窓を開けてカンキする
- 2 絶好のキカイを逃してしまった
- 3 コウキの目を向けられた
- 4 キガイを加えられた

オ テイチョウ

- 1 客の出足はテイチョウだ
- 2 キチョウな体験をする
- 3 違反行為でチョウカイ免職になる
- 4 万里のチョウジョウを歩いてみたい

問2 傍線部A「良寛のいましめ」とありますが、そのいましめの趣旨を十五字以内で述べなさい。

問3 傍線部B「そんな言い方がいかに傲慢無礼な物言いか」とありますが、この部分について次に示す(i)～(iii)の問いに答えなさい。

(i) 傲慢無礼の意味を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 えらそうに振る舞っているのに自分の無知に気付かないさま
- 2 まるで側に人がいないかのように勝手気ままに振る舞うさま
- 3 おごり高ぶっていかにも人を見下したような態度をとるさま
- 4 他人に対する態度があつかましくて恥を知らないでいるさま

(ii) 次に示す説明文の空欄に適する語を漢字で答えなさい。

「させていただく」という使い方は、自分の行為が相手の許可を得て行う必要がある場合や、相手の意向を受けて行う場合には  表現として適切です。しかし、許可を得なければならない相手が想定されない場合とか、相手の意向に関わりなく使う場合には不適切です。相手に配慮しているように見えながら、実は押しつけがましく尊大な表現だと考えられます。

(iii) 次の1～4の文例で、適切なものには○、不適切なものには×を答えなさい。

- 1 (問題提示者に対して) しばらく考えさせていただきたいのですが。
- 2 (ロードショウの映画を見て) きょうは感動させていただきました。
- 3 (説明してごらんと上司に言われて) では説明させていただきます。
- 4 (自己紹介で) 昨年からこの会社の社長をさせていただきます。

問 4 傍線部 C 「純粹に知的な成功」とはどのようなことが考えられますか。具体的な一例を簡潔に説明しなさい。

問 5 空欄 D に適する四字熟語を、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 温厚質実
- 2 質実剛健
- 3 質素儉約
- 4 賢忍質直

問 6 傍線部 E 「人間作りということに関して暗示的」とありますが、どのようなことを暗示していると考えられますか。

その説明として最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 品位ある人格というのは快適と便利を排除したときに身につけられるものである。
- 2 品位ある人格を得るためには清廉潔白こそが何よりも大事な条件であるといえる。
- 3 品位ある人間に成長するためには厳しさに耐える過程を体験しなければならぬ。
- 4 品位ある人間になるためには正しい言葉遣いを身につけることが第一だといえる。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

庭に植えるところがないからと玄関脇に植えたアロエが家の前の道路にはみだして困ったと父が言い出した。私と妹は、植え替えが面倒臭くて聞かないふりをした。そんな話をしていると母が帰宅した。母は、ぎっくり腰で入院した祖母が末期の子宮癌であると告げ、アロエのことをどうの言っている場合ではなくなってしまった。

ある日、私が祖母の好きなら焼きを持って行くと、祖母は気持ちよさそうに寝ていた。母から、昨日はお腹が痛いと言って涙を流していかわいそうだった、と聞いていたので、私はほっとした。

病院というところは、玄関から入った瞬間には居心地が悪くもぞもぞして早く帰りたいと思うが、しばらくいると慣れる。そして、<sup>A</sup>外に出ると、すべてが強烈すぎる感じになる。交差点でいっせいに押し寄せてくる車たちや、永久に生きると思っている人々の声の大きさや、色の洪水に驚く。そして家につくころには慣れる。行ったり来たりしていると自分が不思議な地点にいることに気づく。小さい頃読んだオルフェの話の思い出。彼は死の世界の住人になった妻を連れ戻すことができなかった。匂いが違う。生命の発散する濃い匂いはもう、あちらの世界ではただただ押し付けがましい毒々しい尖った匂いに変わってしまう。その反対に死の匂いを人は忌み嫌う。太陽の下に出ると、弱っている人が発散する死の匂いは雪みたいにすぐに溶けてしまうが、そのかすかな匂いは麝香みたいに、遠くからでもかきわけることができる。弱った同胞を人は恐怖する。自分達の生活が終わってしまうように<sup>ア</sup>する。どちらも慣れてしまえば同じだというのに。

私が花瓶の花を活けかえていたら、祖母は目を開けて言った。  
「うちの鉢植えは元氣かしら？」

植物が好きなら祖母の大切な鉢植えたちには、私が毎日水をやりをしいっていた。見ればなんということもない植物たちだった。盆栽でもなく、貴重なものでもない。千両や、ジャスミン、そてつ、なんだかわからない豆類の木、おじぎそう、パキラ、カランコエ……それでも毎日水をやっているとその植物たちが祖母を狂おしく求めているのが感じられる気がした。それは妹が産まれるまでは両親が共働きでずっとあずけられていたから、どうしようもないほどおばあちゃん子になってし

まった私が感じた幻なのもしれなかった。祖母の死は私にとって耐え難かった。淋しかった私が足をくっつけて寝た祖母。私の心に何か小さな影がさすと、本人よりもはやく気づいて私の好物のさつまいもの天ぷらを作ってくれた祖母。祖母の関心が日に日にこの世から、私から離れて行く。打ち捨てられた気持ちの植物たちと私は似ていた。だからそう思ったのかもしれない。いつも自分のことよりもおまえたちや私を気にしてくれた人が、やっと自分のことだけ考える時が来たんだよ、と私は水やりをしながら自分を「イ」させようとしていた。

祖母は少しは話したがすぐ眠ってしまった。毎日寝るようになる、人は急激に影が薄くなっていく。それを感じると胸が苦しかった。人間がずっとくりかえしてきた営みに参加している自分。それを奇妙に遠くから眺める気持ち。

そんな生活に慣れたある午後、母の作った煮物を持って病室を訪ねると、祖母はめずらしく起きていた。

「ねえ、昔はシクラメンが嫌いだったのよ。」

祖母は言った。

「よくそう言っていたよねえ、でも、私もあんまり好きじゃない。なんだか湿っている感じがして。」

「あんたは植物のことがよくわかるね、おばあちゃん、思うの。あんたは植物の仕事が合ってるわよ。ホステスはおやめなさい。」

私が水商売で身をたてているのを祖母はいつも反対していた。ただし私はホステスではなく、父の経営しているバーのバーテンダーだったのだが、いくら説明しても祖母にとっては同じことのようなだった。

「おばあちゃんがそう言うなら、考えてみる。でもどうしてシクラメンの話？」

「そのね、窓にいますよ、シクラメン。もう葉ばかりになっちゃったけどね。この間まで次々に花を咲かせていたのよ。中原さんにももらったんだけどね。はじめは「ウ」な花だなあ、と思ったの。昔から苦手だったのよ、水をあげるやり方を間違えると、いつもぐんにやりとなつてね、太い茎が虫みたいで、なんていやらしい花だろうって。でも、ここに来て、時間ができたら少し違って見えてきたのよ。あの茎は水を吸い上げるためにあるのね。水をやってから、あの花たちが一所懸命に首をあげてお日さまにあたろうとしているのを見ると、ああ、あんたたち生きてるんだねえ、って退屈しないのよ。」

時間ができるとってそういうことね。もうシクラメンとは友達になったから、あっちではシクラメンも育てられる自信がついたわ。」

「そんなこと言わないで。」

そうやって今まで嫌いだった全てを好きになってしまっただけから初めて行くところがあるのだろう、と思うのは切なかった。

祖母の意識がほとんどなくなったのは春だった。三日に一回くらい意識が戻ってくる時があったが、ほとんどしゃべれなかった。ああ、誰々ちゃん来たの、と家族の名前を言うくらいだった。

その夕方、祖母の手を握っていた。冷たい手だった。点滴の針であざができて青黒く変わった色をじっと見ていた。口のはしに白く乾くよだれさえも愛しかった。

ふいに、祖母が言った。

「アロエが、切らないで、って言ってるの。」

細い、途切れ途切れの声で、はじめは何のことかわからなかった。

「アロエが、駐車場の、陰で、車に、ふまれて、痛いって。」

「にきびも傷も、なおすから、花も咲かせるから、切らないであげて。」

祖母は夢うつつでまるで誰かの言葉を聞き取るかのように、少しずつ、そう言った。私はぞうつとした。なんで私だけがこれを聞いてしまったんだろう？ と思った。

「それでね、おばあちゃんはあるにはわかると思うの、そういうエがね。植物ってそういうものなの。ひとりのアロエを助けたら、これから、いろんなね、場所だね、見るどんなアロエもみんなあんなのことを好きになるのよ。植物は仲間同士でつながっているの。」

一気にそう言うと、祖母は眠った。

すぐに母と妹が看病の交代でやってきたけれど、私はどうしてもそのことが言えなかった。のどがつまったようになって、うまく言葉が出なかった。じゃあ帰るね、と病院を出た。外は晴れて、月が出ていた。みんな優しい顔で家路を急いで

いた。車のライトが夢の中の景色みたいに暗い道を照らした。私は無言で祖母の部屋に行き、遅くなってごめん、といいながら植物たちに水をやった。電気をつけたら、<sup>D</sup>部屋にちりばめられている祖母のささやかな人生が蛍光灯の真つ白い光に浮かび上がった。ふかふかの座ぶとん、クリスタルの小さな花瓶。筆と硯、きちんとたたまれた白いエプロン。海外旅行で買ってきた異国情緒あふるるおみやげが並んだガラスケース、眼鏡、文庫本、小さな金の時計。古い紙のような、祖母の匂い。私はつらくなって電気を消した。するとガラスの向こうには植物たちが息づいていた。外の明かりにふちどられるように、生き生きと緑色だった。さつきやった水の滴がきらきら輝いていた。暗い畳にじっと座ってそれを見ていたら、なんだか少しづつ楽になってきた。これはひとりの人が生きてきたあたりまえの足跡で、悲しくも苦しくもない、どちらかといえば幸せないものなのだという気がしてきた。悲しみににごった目で見た第一印象で決めるものではないと植物が教えてくれたような気がした。ただ陽を求め、水を求め、愛を求めて生きていくだけの美しい生物たちが。

私は家に帰ると、玄関から中に入らずに庭の門の鍵を開けて物置きに行き、シャベルとトロッコを出してきた。そして再度玄関脇に戻り、<sup>E</sup>アロエをていねいに土から掘り出した。根も入れるとものすごい大きさになり、素手だったので痛かったが、なんとか運んで、庭の昼間陽当たりがいいところに植えた。春の大きな月のおぼろな明かりに照らされて、植え替えの泥にまみれたアロエは生命の力を発散していた。オ化して「ありがとう」と言っていると言いたところだったがそんなものではなくて、ただひたすらに生きてあちこちに根をはり、葉を広げていた。それにまた私ははげまされる思いがした。

(吉本ばなな『体は全部知っている』より)

\* 出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 空欄ア～オの中に最も適する熟語を、それぞれ次の1～4の中から一つ選びなさい。

	ア						
	1	妄想		イ	1	説得	
	2	実感		2	諦観		ウ
	3	錯覚		3	幻惑		1
	4	想像		4	納得		怪異
							2
							快活
							3
							陰気
							4
							内気
							エ
							1
							感性
							2
							理性
							3
							知性
							4
							徳性
							オ
							1
							一体
							2
							戯画
							3
							具体
							4
							擬人

問2 傍線部Aの「外に出ると、すべてが強烈すぎる感じになる」の理由として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 病室では居心地が悪く落ち着かないが、外では安心して落ち着くから。
- 2 病室では死の匂いを強く嗅ぐのに、外では生命感に溢れているから。
- 3 病院では照明も抑えられ暗いが、外では陽光が眩しいほど輝くから。
- 4 病院では清潔な白色で統一だが、外では多彩な色で溢れているから。

問3 傍線部Bの「打ち捨てられた気持ちの植物たちと私は似ていた」と感じた理由として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 祖母の部屋の忘れられた植物のように、自分を残して祖母が冥界に行こうとしているから。
- 2 祖母から水をもらえない植物のように、祖母からの愛情を受けられなくなると感じたから。
- 3 愛情を注がれなくなった植物のように、祖母が自分だけを考える時が来たと理解したから。
- 4 祖母を狂おしく求める植物のように、自分も祖母に愛されたいという欲に溢れているから。

問4 傍線部C「私はどうしてもそのことが言えなかった」理由として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 伝えたら、祖母の前でアロエの処分について母や妹と言い争いなるから。
- 2 突拍子もなくアロエの話を出したので、神秘的な恐ろしさを感じたから。
- 3 祖母の夢うつつの話だったので、伝えてよいか判断ができなかったから。
- 4 祖母が自分だけを植物の心情がわかると信じていると思ったから。

問5 傍線部D「部屋にちりばめられている祖母のささやかな人生」とは何を指しますか。最初の五字と最後の五字(句読点を含まない)を答えなさい。

問6 傍線部E「アロエをていねいに土から掘り出した」のはなぜですか。その理由として**相応しくないもの**を次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 一つの命を助けたら、繋がっている全ての生物が自分を好きになってくれると信じたから。
- 2 大好きな祖母の遺言と受け止め、いくら大変でもアロエの生命を救い出そうと考えたから。
- 3 アロエも、ただ陽を求め、水を求め、愛を求めているだけの美しい生物だと実感したから。
- 4 玄關脇のアロエも、祖母の家に生きる植物の仲間としてつながっていると感じ取ったから。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1、問2）に答えなさい。

A

もともとヨーロッパの社会においては、つい一〇〇年くらい前までは、どこの農家でも、チーズやバターを手造りしていたのである。工場生産が中心になったのは、十九世紀も後半になってからのことだ。

だから、田舎に行けば、チーズを手造りする道具も残っていれば、その技術の伝承もまだあるのである。日本でも、田舎の旧家には、味噌を手造りする道具がいまも残っているようなものだ。

そうした道具と技術で、手造りのチーズを作って売っている生産者が、フランスには結構いる。工場生産のチーズがあまりにも画一的になりすぎてしまったことへの反発から、少々高い金を出してもよいから手造りの本物の味がほしいという人がかなりいて、手造りのチーズを、工場生産のチーズの三倍、四倍の価格で買うのである。

そうした生産者の中で、ペリグー郊外でシェーヴル（山羊乳チーズ）を手造りしている夫婦に会ったことがある。

二人は、数年前まで山羊乳の生産者で、協同組合の工場に山羊乳を売っていたが、生産過剰による生産調整で、買入れ数量を減らされたことに腹を立て、それなら自分たちでチーズを作って売ってやると、それまで何の経験もないのに、付近の農家から昔のチーズ造りの道具をもらってきて、見よう見まねで造り始めたのだという。

やってみると、結構いいものができた。しかし、できたはいいけど、販売をどうしたらいいかわからない。パリのランジス市場に行けば、何とかなるのではないかと、自分が作ったチーズを持って、パリに出かけた。そして、ランジスに軒をならべているチーズの卸売商のオフィスを一軒一軒まわって、自分の作ったチーズを試食してくれないかと頼んでまわった。数十の業者をまわってみたが、どこもバカにしたような目で見るだけで、試食すらしてくれなかった。

それはそうである。ランジスの卸商ときたら、大生産者から毎日トン単位で仕入れているのであって、地方の零細生産者を一人一人相手に行っている暇はないのである。

最後に一軒だけ、試食してくれたところがあったが、そこもいい返事はしてくれなかった。ガツカリして翌日家に帰ると、試食してくれた業者からの注文状が待っていた。それからトントン拍子に発展し、いまでは、商品の種類も十種類以上に増

え、年商も数千万円に達しているという。

手造りチーズの世界では、こういうサクセス・ストーリーがまだまだにありうるのである。手造りチーズがそれだけ好まれるのは、やはり自然の味が求められているからである。手造りチーズと工場生産チーズの最大の違いは、原料乳にある。工場生産では、原料乳を必ず高温殺菌してから使う。殺菌してから、乳酸菌などをスターターとしてまた注入する。

それに対して、手造りチーズのほうは原料乳を殺菌しないでそのまま使う。原料乳に入っている天然自然の菌をそのまま生かしてスターターとする。工場では原料乳を殺菌するのは、一工程の生産ロットが大きく、雑菌が繁殖してチーズをだめにするなどの事故が起きた場合、そのロット全部がだめになってしまうので、リスクが大きすぎるという理由による。そうした事故はめったに起きないが、起きた場合の被害が甚大じんたいになるわけだ。

しかし、殺菌するということは、発酵という複雑かつ精妙な自然のプロセスを、人工的で単純かつ画一的なプロセスに変えてしまうことを意味する。そこに味の違いが出てくる。殺菌した牛乳は、全国どこでも同じ味がするが、殺菌しない牛乳はその土地の味がするという。その個性がチーズの味にも出てくるのである。だから、手造りチーズは、〃殺菌してありません〃 (non pasteurise) 〃生乳から作りました〃 (au lait cru) 〃〃の売り物にしている。

消費者のこうした本物志向に対応して、大手業者のボングラン社は、最近、原料乳の徹底的な品質管理によって、工場生産の無殺菌チーズを開発し、これをちよつと高めの値段で売り出したところ、大人気を博したという。

大規模な工場生産によって均一な品質のものを大量に安く作ればよいという十九世紀以来の効率至上主義的発想では、もう消費者のニーズに対応していけないという現象があらゆる産業において起きていますが、食品産業もその例外ではなかったわけだ。

大量に安くよりは、高くても個性と多様性があるものが求められているわけである。

(立花隆『思索紀行』より)

\*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問 1 空欄 A に適する見出しを答えなさい。

問 2 文中での工場生産チーズの良し悪しに具体的に言及し、自分自身はどう考えるか百五十字以内で説明しなさい。